

第2回 SPARC Japan セミナー2013

「人社系オープンアクセスの
現在」

ディスカッション

蛭名 邦禎	(神戸大学大学院)
青木 玲子	(一橋大学経済研究所)
石居 人也	(一橋大学大学院)
Martin Paul Eve	(Open Library of Humanities)
鈴木 哲也	(京都大学学術出版会)
松本 和子	(慶應義塾大学理工学メディアセンター)

話題提供：人文社会系図書館とオープンアクセス

●松本 私は昨年11月まで三田のメディアセンターにおり、ほぼ30年以上、人文社会系の図書館にいたこととなります。今日は私の経験から、人文社会系の図書館の現状を皆さんと共有できたらと思います。

人文社会系図書館の動向

現在、STM（理工系・医学系）の図書館は、雑誌がどんどん高くなり、買いきれなくて大変な状況ですが、人文社会系は、雑誌だけではなく、図書をしっかり買っていきます（図1）。慶應義塾大学も医学や理工は雑誌に90%のお金を使っていますが、人社系ですと半分は図書に使っています。財政難で予算は横ばいか下がる一方の中で、人社系の研究者は雑誌も欲しいのだけれども仕方がないから諦めるということで、今、どんどん電子ジャーナルになっているところです。

それは、誌代の値上がりや包括契約のためです。今回の円安もありますが、経済的状況がどんどん悪化していることと、また、出版社による理不尽な値上げもあると思います。その影響を受けてかどうか分かりませんが、業務的にはリファレンスやILLの件数はかなり減っています。図書館に来るのは電子化されていない資料や図書を利用するときだけで、文献がどこにあるかということは今はあまり問題にはならなくなった

ので、リファレンスの件数も減っています。

一番問題になっているのが、高いお金を掛けて買っている雑誌をきちんと利用者に届けるナビゲートのところ。慶應では、OPACではタンジブルな図書しか引けないので、ディスカバリーツールと呼ばれるような高いソフトウェアを入れて電子ブックや電子ジャーナルのナビゲートをしなければいけません。そこに、例えばフリーのものを入れるときにはどうしたらいいか、オープンアクセスのものを入れていくにはどうしたらいいかというノウハウが不足しています。ですから、本当に電子ジャーナルを使う研究者には、Googleで十分、図書館のOPACは使わないと明言する先生もします。

さらに悲しいことに、図書を買っていきますので、どんどん書架が足りなくなります。そうすると、電子ジ

人社系図書館の動向

- * 財政危機が図書館講読誌の電子化に拍車
- * 誌代の値上がり・包括契約・円安により人文・社会科学分野であっても購読維持が困難に
- * レファレンス件数、ILL件数の減少
- * 契約タイトルへのナビゲートが課題に
 - * Google Scholar で十分という声 vs Discovery tool
- * 書庫狭隘化対策に電子化されたタイトルが利用される

(図1)

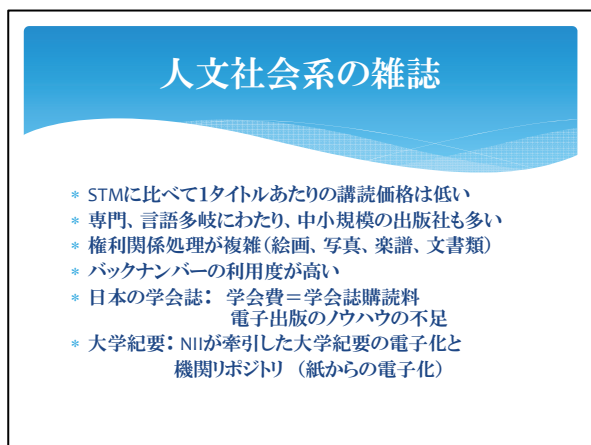
ジャーナルで利用できるのだから雑誌は要らないといって、雑誌がどんどん遠くの保存書庫に行ってしまったら、除籍されたりする運命になっています。

人文社会系の雑誌

人文社会系の雑誌をオープンアクセスも含めて考えてみると、STM はともかく 1 誌当たりのタイトルが高いので、今度消費税が 8% になったら絶対には買えないという雑誌がたくさんあるのですが、人社系はそれほど高いタイトルはないので、図書を買うのを少し諦めて雑誌を買い支えるということができています (図 2)。

そうは言っても、電子化されていない雑誌もまだまだたくさんあります。専門が非常に細分化しています。例えばシェークスピア研究の学会は世界中にどれぐらいあるのか。日本でも関西や名古屋など、ローカルないろいろな研究会があり、シェークスピア研究だけでも多数の雑誌が出ています。言語も、英語だけでいいということは人文社会系ではあり得ませんので、たくさんあります。中小の出版社も多く、紙でも入手が難しい状況も起きています。

もう一つ特徴的なのは、STM と違って、研究発表の速さの重要性、先に発表した方が勝ちということがないので、どちらかという確実にオーセンティックなものを出していくというところもあります。ですので、最新号を読みたいという需要はそんなに多くないのですが、バックナンバーが非常に利用されます。例



(図 2)

えば J-STORE というパッケージが慶應では一番使われます。最新の 1~2 年分は見られなくても、過去のものがたくさん利用されます。J-STORE はオープンアクセスではなく、図書館同士が協力してメンバーシップの形を取って、デジタル化してプリザベーション、ディストリビュートするものです。やはりそこには、オープンアクセスとは逆の方向に行く、プレステージなジャーナルがあるから使われるという感じがしています。

日本では人文社会系のオープンアクセスは進んでいないのではないのかということがあるのですが、日本語のものについては、NII の CiNii を見ていただくと、PDF にリンクがあって、全文がフリーで見られるものもかなり増えてきています。ただ、日本の学会誌を支えているのは会員の学会費です。そうすると、ただで最新号を出してしまったら、お金を払う必要が全然ないではないかということになり、誰も会員になってくれません。もちろん学会には研究大会への参加などのメリットはあるのですが、ある意味、会費を学会誌出版に充てているところがあるので、最新号からオープンアクセスにするということはしません。しかし、NII や J-STAGE 等でバックナンバーについては公開がかなり進んでいます。

ただし、私が大学紀要を慶應の機関リポジトリに載せるときに、小さな出版社や印刷所だと電子出版のノウハウがなく、どうしたらいいかという相談も非常に受けたことがあります。

また、大学紀要も、NII がお金を掛けて CSI 事業で電子化をしてくださったこともあり、紙からの電子化は進んでいるのですが、やはり人文社会系では、その後続いていない紀要もあるようです。お金を取って経常的に電子化を進めていくところがまだまだなのかという気はしています。ただ、OA が全然進んでいないかという、国内に関してはそうではないと思います。

人社系学術誌と研究者

これは私が図書館で研究者の方と接していて感じる

ことなのですが、それを裏付けるのが、2011年のSCREAL調査です(図3)。東北学院大学の佐藤先生を中心に、逸村先生も関わっておられるものですが、やはり人社系の研究者は印刷体が大好きで、電子化されたものがあったとしても紙で読みたい、そして日本の場合には雑誌を非常によく使うという傾向が出ました。

先ほどJ-STOREがよく使われていると言いましたが、日本の研究者は洋雑誌をととてもよく読んでいます。しかし、日本に特化したものは別として、人社系の研究者の投稿数は少し少ないのではないかと。それはやはり言語の問題や、レフェリーが日本の事情が分からないこともあるのではないかと気がします。

もう一つは、研究業績は最終的には図書を出すこと、それも単著の図書を出すことだという意識があります。オープンアクセスと図書がどのように考えられるのか、先生方の話をあまり聞いたことはないのですが、本を出すことが自分にとってはすごい業績だという意識が強いと感じます。

ただし、若手のオーバードク、ポストドクなどの研究者がなかなか職に就けない問題もあります。彼らは業績をどんどん出していきたくために、大学紀要や小さい学会紀要にも出して、それがウェブで見られるようになっていけば自分の業績をアピールできるので、それをやっていきたいという話もよく出てきます。

「僕の論文を公開したいのですが、どうしたらいいですか」という質問を受けることがよくあります。私たちもいけないと思うのですが、人文社会系の研究者の

方にオープンアクセスと言っても、「オープンアクセスって何ですか」ということがまだまだあります。例えば図書館の電子ジャーナルリストに、私たちは「オープンアクセス」ではなく「フリージャーナル」、つまり無料で利用できるジャーナルというマークを付けて提供しているので、ますます先生方は「オープンアクセス」などという言葉は分かりません。ましてやゴールドダのグリーンだのと言っても、人文系の先生は何のことか分からないのです。また学会も2年ごとに編集委員が代わりますので、分かる先生は分かるけれども、大御所の先生になると「何のことだろう」ということになり、4年前に紀要の編集委員だった先生がもう一度聞きに来ることもあります。

オープンアクセスにどう取り組むのか

では、図書館としてオープンアクセスをどのようにサポートしていけばいいのか(図4)。私見ですが、やはりオープンアクセスとは何なのか、学術情報流通のコストは誰が持つのかということ、図書館から研究者に伝えていくことがまず大事だと思っています。

コスト分析も非常に大事です。例えば、サブスクリプションをリダイレクトしてAPCにするのか、参加費として払うのか。変な話ですが、慶應は総合大学ですから、医学部など人の命に関わる研究を阻害してはいけないということがあり、医学部が雑誌を買えないのだったら人文系の図書費を減らして医学部の電子ジャーナルを買えというような理論が結構堂々とまかり

人社系学術誌と研究者

- * 2011年SCREAL 調査
- * 人社系研究者の嗜好:印刷体の利用を好む
和文学術雑誌の需要が高い
- * 外国雑誌:読まれているが、日本人のレフェリー少ないため?日本人の投稿少ない
- * 研究業績は最終的には単著の図書
- * 若手研究者の研究成果の発信は雑誌・紀要から
- * 国内学会・出版社・研究者はOAという言葉自体を知らない?理解していない?

(図3)

OAへどう取り組むのか

- * 図書館としての取組
- * 研究者へのOAの周知
- * 図書館員自身の意識改革とコスト分析
リダイレクトするメリット、持続可能なモデルの検討
- * 大学としての取組
- * 機関リポジトリへの登録
- * 国としての取組
- * 著作権問題への取組 SCPJ
- * 科研費等研究助成金に成果のOA化を

(図4)

通ってしまいます。そこを何とか押さえているのですが、そういう苦しいところがありますので、やはり人社系といえどもライブラリアンがコスト感覚を持っていないといけません。

それから、リポジトリへの登録を進めることも大切です。慶應がいけないのは、個人登録がなかなか進まないことです。大学紀要にはどんどん載るのですが、先生方に「発表したものをリポジトリに載せてください」と言ってもなかなか載せていただけません。それも図書館だけではなく、研究支援や学部からの情報発信により、機関リポジトリを進めていく必要があると思います。

それから、国としての取り組みで、これから著作権や権利処理の問題が、例えば TPP になって親告罪ではなくなくなってしまったときに怖い状況になると思います。そういうところで学会の著作権の取り扱いも問題になります。SCPJ という著作権ポリシーをつくったサイトが今年3月で終わってしまい、その後続いていません。オープンアクセスに関わるには、人文社会系の著作は現著作が関わります。先ほど言った文書も、マニスクリプトもありますし、漫画も、紙で出版するときの許諾ではウェブには載せられません。まして国際的なものになったときには、著作権の保護期間の違いなどがあるので、そういうところのサポートが必要だろうと思います。

それから、科研費による研究成果については今、2枚ぐらいの薄い科研費報告書が出ていますが、やはり科研費は公費ですから、できれば図書も含めてもっとオープンアクセスで公表する政策を策定していただき、そういうものにコミットしていくように、図書館としてもパブリックオピニオンなどを出していく必要があるかと思っています。

ディスカッション

●**蛭名** 松本さん、どうもありがとうございました。今、人社系図書館についてお話いただきました。ま

た、4人の先生方にはいろいろ問題提起をしていただきました。幾つかの論点があったと思うのですが、まず、現状がどうなっているかということが一つあります。特に、人社系のオープンアクセス化が遅れているのか、本当にそうなのかという問題提起がありましたし、研究の仕方が違うというお話もありました。そういう現状について、もし補足があれば少し補足していただいてから議論に入りたいと思います。

論点としては、オープンアクセスの目的を考えると、一つは、鈴木さんから非常に根源的な問題提起もありましたが、(1) 学術の推進自体をどう行うか。そして、それに関して、例えばデータ収集の段階、データを整理した段階、それを学術論文としてパブリッシュする段階、あるいは体系化する段階と、いろいろなレベルがあります。また、学術推進者、研究者の育成モデルの問題も絡んできます。次に、(2) 学術のコミュニケーションをどう捉えるかということです。これにはいろいろな側面があり、同業者に伝える、もう少し広い範囲の研究者集団に伝える、あるいはもっと広く一般に伝える、さらにはファンディングエージェンシーにきちんとエビデンスとして示すこともあるかもしれません。最後に、(3) いろいろな問題点を解決する上で、技術的、あるいは財政的な問題をどうするかということもあると思います。

これらを認識していただいた上で、講演者の方々から補足やコメントがあればまず頂き、それに対してフロアの方からご意見やご質問を頂いて、討論したいと思います。では、青木さんからお願いいたします。

●**青木** 他の報告者の話を聞いて、頭の中を少し整理しなければならないと思うのですが、これは非常にいい機会だと思います。オープンアクセスには情報発信の方法が重要であるとして、あとはアクセスの問題なのか。Eveさんの報告で出てきたのは、プレステージということだと思います。成果を発信する段階ではなく、研究活動の中で雑誌を使ってお互いの成果の評価を行っている。そのプレステージを持つジャーナルが

あるが故に、高いジャーナルを買い続ける。それを解決しようとするのが、Eveさんのされている仕事のよ
うな気がしました。

そのこのところに、皆さんのオープンアクセスの期待が
どういふものか、それによつて誰がお金を出すかも
関係してきます。評価するために雑誌が要するといふこ
とは、確かに研究者のコミュニティーとしてそれなりに
価値があるので、その場合は国がお金を出してもいい
し、学会がお金を出してもいいでしょう。松本先生
のお話に、学会誌を購読するために学会費を出してい
たといふ議論がありました。評価の方法として学会
誌を維持するのだつたら、学会としてお金を集めて、
その学会誌を維持することが必要だといふ合意に達す
れば、できるよふな気がしました。ですから、評価の
ためのジャーナルのコミュニティーの中での価値も大
事な要素ではないかと思ひます。

●**蛭名** オープンアクセスへの期待がどういふ側面
あるのかをはつきりさせないと、それに対する答えが
出てこない、特に流通といふ面もあるけれども、評価
も重要な側面ではないかといふご指摘ですね。

●**青木** 評価といふ価値です。

●**蛭名** どうもありがとうございます。それでは、石
居さん、お願いします。

●**石居** 先ほどの私の話の補足にもなるかと思ひます
が、鈴木さんと松本さんのお話を伺つて、そこに引き
付けて現状を少しお話したいと思ひます。

まず、鈴木さんが出してくださつた、国文学会の自
己批判、あるいは、出版に適合的なのか、オープンア
クセスに適合的なのかといふ峻別をしっかりとすべき
だといふ点に関連して、私は先ほど、若干のオープン
アクセス活用事例として、ワーキングペーパーを使つ
て目録を公開しているといふ話をしました。そこで公
開したのは目録とそれに関わる若干の史料であつて、

調査史料の全貌や一点一点の画像を紹介することまで
はしていません。それは、当然のことながら一点一点
をそこで紹介するのは不可能だといふ事情もあります
が、もう一つは、あくまでも目録や調査の報告は、次
に研究する人が現場に足を踏み入れる入り口になるべ
きだと思ひているからです。オープンアクセスに接す
ることで全てが完結してしまふのは、やはり望ましい
研究の在り方ではないと思ひるので、どのように活用す
るのか、あるいはどういふ狙いを定めるのかといふこ
とは、研究者の側も考えなければいけないだろふと思
ひます。

それから、出版計画があふれているといふ話も鈴木
さんからありました。これは私個人に限つた話ではな
いと思ひますし、ある面では非常にありがたいことで
すけれども、とにかく出版社から持ち込んでいただく
出版計画が多いのです。これも、研究者自身が仕事の
「仕分け」をきちんとしなければいけないといふこと
でもあると思ひますが、そういう状況が一方にはあり
ます。

それから、松本さんが最後におつしやつた、科研費
の成果をオープンアクセスにするといふことは、仕組
みとしても大事だと思ひます。科研費で行つた研究は、
単年度である程度の成果を出していかなければなりま
せん。歴史学は早さよりも完成度だといふ話をしまし
ましたが、助成を受けて研究をしていく以上は、ある程度
の速報性、そして一定期間内での研究成果の公表も当
然必要になります。先ほどのワーキングペーパーの活
用事例も、科研費の成果として出しているものでもあ
ります。オープンアクセスは、今日の研究者の多くが、
助成を受けなければ研究を進めにくいといふ状況を勘
案するとき、そうした状況との親和性は非常に高いと
感じました。

●**蛭名** ありがとうございます。オープンアクセスと
いつてもいろいろなレベルがあり、史料の場合には全
部は出せないで、制限された部分を出さざるを得な
いといふこと、また、出版計画の持ち込みが多いのは

事実である、それがもしかしたら研究を多少ゆがめているという側面もあるかもしれないということでした。それから、例えば科研費のようなファンディングが得られた場合、その助成に対する速報性ということから、オープンアクセスの必要性があるのではないかということをご指摘されたと思います。

では、Martinさんからコメントをお願いします。

●Eve 先ほど話題に上がった、コミュニケーションの基本的な目的という話に戻りたいと思います。評価が基本的な目的と考えるなら、学术界は勝ち負けを競うゲームの場に成り下がります。評価にも一定の役割はありますが、学術コミュニケーションの理想的な役割は、各分野の最先端で現在進行中の研究内容を、民主的な形で同業者や社会全般に伝えることです。現在の出版システムは、歴史が偶然もたらした産物であることを、決して忘れてはいけません。歴史的な背景があるというだけの理由で、今のシステムは存在しています。今ゼロから作るとすれば、いわゆる「オープンアクセス」が出版の主流になるでしょう。私の話はやや理想論かもしれませんが、研究のコンテキストが先程から話題になり、どんなコンテキストを前提に研究を世に紹介するか理解する必要があるということでした。俗世から切り離されたエリート主義的な印象を与えるので、私はこの手の議論に対して慎重です。大学に入ってきた学生はいずれ社会に出るのですから、大学が学生を受入れ教育し追い出すだけの、孤立した場所になってはいけません。教養を備えた、学術研究を目的とする組織であるべきです。

もう一点だけ言わせて下さい。学術コミュニケーションの市場という話が出ましたが、本当にそれは市場（マーケット）なのでしょう。例えば私が何らかの研究成果を入手したい場合、購入先の選択肢は他にありません。特定の出版社が、私の研究に不可欠な研究成果を集めた単行書の権利を保有しているのです。出版を市場経済の視点で捉えるのは、果たして正しいことでしょうか。

●蛭名 四つご指摘があったと思います。評価は大事だけれども、同業者や社会への流通が大事であること。それから、出版自体が歴史的な制約を持っていて、今から新たに始めるとしたらオープンアクセス的なものが主体となることもあり得るのではないかと。そして、大学や学术界が社会の中でどういうコンテキストを持つかが非常に重要である。最後に、マーケットと学術流通は矛盾があるかどうかということでした。どうもありがとうございました。

では、鈴木さん、よろしくをお願いします。

●鈴木 今、Martinさんが、教育的な側面を重視しなければならぬとおっしゃいました。これは私も全く同感です。その点で、Martinさんの報告にあったオーバーレイジャーナルをトマス・ピンチョンをテーマに出すという話は非常に面白いと思ったのです。

電子的なメディアに対して、本や伝統的な紙の学術雑誌が勝っていると思う点の一つは、その discoverability、すなわち「見つけられやすさ」です。本を1冊読むと、自分の目的でなかったものを見つけてことができるという側面があります。ところが電子的なデータでは、自分の検索キーワードにヒットしたものしか出てきません。本や雑誌としてプリントされているものをばらばらと見てみると、例えば医学系の研究者が骨格と運動の関係について書いた論文をたまたま見たゲームメーカーが、「これは面白い、ゲームソフトの開発に使えるぞ」ということになり、実際に今、3Dゲームの開発などで盛んに使われるモーションキャプチャーという技術は、そのように成熟してきたと言われます。こうしたいわば領域を超えた関心は、電子ジャーナルだと生まれません。先ほどの「Science」の論文ではありませんが、どうしても自分の関心だけに収斂されてしまうと、隣にあるものが見つけられないという側面があります。紙にはまだまだそういう利点があると思いますが、オープンアクセスの中にこの discoverability の要素を付け加えていく上では、集積された情報をうまく整理してユーザーをナビゲーション

する機能が非常に大切だと思うのです。

その点で、Martin さんが取り組んでいるオーバーレイジャーナルは、特定のテーマでいろいろなアートを見せながら、「こういう面白いものがあるよ」と幾つかまとめて出してあげる、しかもそれを学生には無料で、研究者には有料で提供するというのは、ビジネスとしても非常に面白いのではないかと思います。

もう一つ紹介したいことがあります。先ほど松本さんが、図書館がこれから果たすべき役割について幾つか整理されましたが、一つは、やはり人づくりとか、教育ではないかと思えます。この11月1日に、私どもの出版会と京都大学附属図書館が共催して、リポジトリ等での発表の機会をどう使って自分の研究を促進するのか、またその先に、より広い、同業者でない他の人たちに対してインパクトがある論文を書くにはどうするのか、具体的な作品を通じて勉強しようというワークショップを催します。そういう人づくりが大事ではないかと思っています。いずれにしても、有効に利用するためには、目的に応じた利用の仕方、あるいは公開の仕方をつくり上げていかなければいけないのではないかと思います。

●**蛭名** どうもありがとうございます。教育的な側面を強調されたと思います。オーバーレイジャーナルが、本が持っていたそういう側面をある程度持てるのではないかということと、その利用の仕方も含めて考えていく必要があるということでした。

松本さん、補足があれば少しお話しいただけますか。

●**松本** 今の鈴木さんの人材育成のお話で、オープンアクセスだけでなく、図書館はどんどん人が切られて委託化が進む中で、どうやって学術推進に役割を果たしていけるかということは、大きな課題だと思っています。

●**蛭名** 人材育成がすごく重要だということですね。どうもありがとうございました。

皆さんから一通りコメントいただいたところで、会場から質問を受けたいと思います。

●**Q1** 石居先生に一つだけ伺いたいことがあります。紙媒体への愛ということをずっとおっしゃっていたのですが、私はある人文系の学会の情報担当の委員をしていて、私どもの学会は紙で出していますが、NII をお願いしてスキャンして公開してもらっています。その場合は、紙への愛をそれほど阻害しないような感じがするのです。もちろん NII で出していただくためには、こちら側も委員会をつくって著作権許諾を取ってと、いろいろ仕事が発生したので、結局、結構大変だったのですが、例えばそういう手間をどこかが持ってくれるとしたら、石居先生の関わっておられる学会ではオープンアクセスにするのでしょうか。

●**石居** 紙媒体とオープンアクセスを併存させるということですね。それはもちろん、阻害するかしらないかと言われれば、しないと言ってよいのではないかと思います。ただ、もう一つそこに生じる難しさとして、オープンアクセスをどういう形で行うのかとも関わると思いますが、歴史学に限らず、扱っている対象に応じて、学術コミュニティの中だけで共有する前提で活字化した研究成果なのか、あるいは誰でもその情報にアクセスできることを前提としてまとめた研究成果なのかということに留意が必要です。私自身の研究テーマで言うと、ハンセン病や被差別部落の問題を扱っているのですが、その辺りで、書くときにどこまで意識できているか、あるいは、それこそ当事者、調査対象者、史料を持っている方たちとの間でどこまで認識の共有が図れているかといった、紙媒体への愛とはまた違う問題が生じてくるのではないかと思います。

●**Q2** 筑波大学の逸村です。私は大学で1年生の教育に携わることが多いのです。そこで、先ほどの紙のファウンダビリティーという点で、紙で読んでから、同じものを電子ブックで学生に安く提供できるビジネ

モデルは考えられないかと思っています。1回読んでみると、「どこかにあったな」ということがあります。そのどこかにあったものを探すのは、紙ではやはり結構大変です。それを何かうまくできる方法はないか。そういう意味で、Martinさんのオーバーレイジャーナルの話と少しかぶっていて興味深いと思ったのですが、何とかありませんか。松本さん、それをまた図書館が何とかできないでしょうか。

●鈴木 検索性という目的ではないのですが、紙と電子媒体の併存に関わって、今、具体的に対応を迫られているのは、アクセシビリティの面からの要求です。例えば目が見えない人が本を読めるように、端末での読み上げ可能なデータにしてほしいという要望は、私どもに対しても非常に強くあるのです。そこで、本を買っていただいた場合、見返しにどこかに特別な紙を付けておいて、そこを切って返送してくださった方に、電子媒体を送るということを考えています。まずは今、企画を進めている「障害者と大学」という事柄に関わる本から始めたいと思っていますが、そうした手法を援用して、紙で買っていただいた方に、検索性の面でより便利な電子媒体をお渡しすることは全く問題ないと思います。図書館にそれがあれば所蔵庫も要りません。

もちろん、そうすることによって生じる、例えばコピーされてしまったらどうなのか、あるいは館外利用はどうなのかという問題は次に考えた方がいいので、出版社が積極的に対応しさえすれば、コピーライトに関わる問題は技術的にはいくらかでも解決可能でしょう。先ほど、小さな印刷屋さんでは紀要の電子化はなかなか難しいという話がありましたが、今日、大学出版部で出している本は大概DTPベースでタイプセットされていますから、何らかの形で電子化するのは難しい話ではないと思います。ですから、特に今後の新刊についてはそうしようと考えています。

ここまで申し上げますと、では既刊書はどうするつもりか、という問いになると思うのですが、これはもう

一点一点のビジネスの話です。その際の具体的な参考事例になるかと思いますが、私どもは京大附属図書館のリポジトリに今、十冊の本を上げていただいています。品切れになった後、リポジトリでご覧になった方々（気象観測や航空管制の関係者・関係機関）からの要求で増刷（改訂新版）に至ったものがあります（『気象と大気のレーダーリモートセンシング』）。つまり、リポジトリに上げていただいたことで、一見、あまり利用されなくなったように見えた本が再利用されるということが現実にあるのです。だから、電子化されたものと紙のものが相反することはあまりないのではないか、ひょっとしたら相補的かもしれないとも思っています。

●Eve 英国ではOAPEN-UKという研究を実施しており、私も参加しています。無料オンライン版がある場合、書籍版の売上にどう影響するかを調査する研究です。現在のデータによると、影響は全くなく、デジタル版が無料で公開されても書籍版がまだ従来通り購入されています。これは、読書用デジタル端末が未成熟で、画面上で読みにくいことが原因かもしれません。しかし、デジタル版には、紙媒体と違う役割があるかもしれないという指摘もできそうです。私たちは両者を異なる形で利用していて、最初から最後まで通読する場合は印刷版が好まれます。他方で無料オンライン版があれば、デジタル版は読みにくい、経済的な理由から書籍版を購入する余裕はないという研究者に閲覧の道が開けます。

●青木 経済では「補完的」といいますが、PDFファイルがあった方が、紙の本の価値がむしろ高くなるという実証分析もあります。

●松本 今、慶應大学では「電子学術書利用実験プロジェクト」を進めています。鈴木さんご存じだと思うのですが、学生に教科書の電子化したものと紙の両方を比較してもらおうと、やはり両方、使い分けをし

す。書き込むのであれば紙だし、最後の試験勉強をするときには何もない真っさらのものがいいし、電車の中で持って歩くには教科書だと重いから電子化したものを iPad で見た方がいいということで、使い分けています。

このプロジェクトで教科書に関するビジネスモデルが提案できればいいのですが、学生の中には、例えば教科書全部を半期 1 万円で電子化したものを売ってくれたら持って歩かなくてよくて、自分が本当に必要な教科書は紙で買うという人もいます。やはり出版社の方には、教科書をぜひ電子と紙で出していただけるといいと思います。

●**蛭名** それぞれ機能があり、まだいいモデルがある可能性があるんで、研究する必要があるらうだということですね。

フロアから質問をさらに受け付けたいと思いますが、いかがでしょうか。

●**Q3** 松本さんが、人文社会系の研究者にとって本の価値が極めて重要だということをおっしゃいました。私は歴史学の出身ですが、論文をまとめて本にすることが極めて重要だとずっと教えられてきたもので、今回、先生方のお話を伺っていて、「オープンアクセス」という単語を、論文で使うのか、本で使うのかという統一が取れないまま、あいまいに議論が進んでいったように感じました。

もう 1 点、研究者と図書館、あるいは国といった主体、それに出版社もくっつき、そこで議論されていたと思うのですが、学会や雑誌を発行する団体、研究者集団が重要かと思います。その理由として、つい先日、歴史学の先生方にお話を伺ったときに、「論文をオープンアクセスで公開されると誰も買ってくれないから、結果的に雑誌を出している学協会がつぶれてしまうのではないか」という懸念をおっしゃっていたのです。そういうことが、人社系あるいは人文系のオープンアクセスを考えたときの一つの議論のポイントにもなる

のかと感じました。

●**Eve** パネルを代表してお答えすると、私たちのオープンアクセスの定義は、ピーター・スーバーの有名な二つの命題に基づくものです。一つ目は、21 世紀初めの BBB 宣言にあるように、料金や著作権・使用权制限を受けないことです。今日の議論では、この点を念頭に置いています。研究を無料でオンラインに公開し、通常の著作権制限と比べ再利用しやすくしています。二つ目に、雑誌を発行して財源にしている学会には問題があります。学会の目的は、知識の普及を促すことにあるべきだからです。そのために論文の有料化という壁を設けねばならないとすれば、方向性が間違っています。学会の財政面のジレンマに対し解決策は示せませんが、資金確保のため情報を貯め込むのは有用な選択肢ではありません。

●**蛭名** ありがとうございます。財政的なモデルをどうするかという話が出ましたが、それに対して何かありますか。

●**Q4** 私は数年前からオックスフォード大学出版局から雑誌を出している国際学会の会計の仕事をしています。その中で一つ、それまで私が全然知らなかったことで、周りの人文系の研究者に聞いても全然知らないことなのですが、日本の大学が電子ジャーナル会社に対して支払っているお金、Oxford University Press に対して支払っているお金が、雑誌を出している学会の運営費に回っているのです。これは、例えば大学図書館が学会誌を直接買ってくれるのと同じことが少し大規模に行われているという話なのですが、一括購入してその中の何パーセントかずつが各学会に回っているという状況があるようなのです。もちろん学会によって出版局との契約の形態が違うようなので、どの学会がどれぐらいもらっているのかは分かりませんが、私の関わっている学会では、世界中の大学図書館が支払ったお金のうち、3 割は日本の大学図書館から回って

きています。

そういう構造があったとして、日本のドメスティックな多くの人文系の学会は、そのお金の循環から完全に離れてしまっているのです。そうすると、例えば国際学会でオープンアクセスについて議論するときには、オープンアクセスにすると各大学が電子ジャーナル会社に払ってくれているお金を諦めるかどうかという議論になります。ところが、ドメスティックな学会で議論すると、オープンアクセスにすると学会費が払われなくなるかもしれないという議論になるわけです。ここに結構大きな違いがあります。皆さんは、人文系の雑誌のオープンアクセスが海外だと割ときちんと議論されるのに、どうして日本だとあまり議論されないのだろう、うまく理解してもらえないのだろうと思われるかもしれません。特に松本さんがそういうことをおっしゃっていましたが、その辺は、背景に置かれている資金のサイクルに随分違いがあります。

それから、ここにいらしている皆さんは理工系の電子ジャーナルに詳しい方が多いと思いますが、例えばエルゼビアなど他の電子ジャーナル出版社でも、そこから雑誌を出している学会に出版費のような形でお金が回っているのかどうかを、ご存じの方がおられたら教えていただけたらと思います。

●**蛭名** お金の回り方が日本と外国とで違うのではないかと、具体的にご存じの方があればお願いします。

●**運営委員** 説明はできますが、今日の話題と違うので、後でお話しします。

●**Q5** 一橋大学附属図書館の小野と申します。人文系オープンアクセスという話では、人文系のデジタル化がそもそもどうなっているのかというところに多くの議論の論点があるような気がします。歴史の史料にしても既存のジャーナルや本にしても、先ほど補完性とおっしゃっていましたが、デジタルのものがあるに

越したことはない、紙が既にあり、デジタルが追加されれば便利になることは間違いがないわけです。オープンアクセスにした際になぜ問題になるのかというと、いわゆるリテラシーの問題でしょうか。

例えば石居先生のところだと、そういうリテラシーがない人たちに対してオープンにされることについて問題があるのか。それから鈴木さんもおっしゃっていましたが、そういうリテラシーがない人を対象として本を出版していくにはどうすればいいのか。そして、青木先生のように、専門なものに関しては本当にオープンにすることに意味があるのか。その辺についてコメントいただければと思います。

●**蛭名** ありがとうございます。オープン化することとリテラシーの問題がどう絡まっているかというご指摘だと思いますが、どなたかコメントを頂けますか。

●**鈴木** 先ほどのご質問で指摘された、この場での議論ではオープンアクセスの定義がきちんとしていないのではないかということに関して言えば、実は私は一種の確信犯としてオープンアクセスの概念を拡張して使っています。具体的に言うと、私どもは本をリポジトリに上げていますが、これは電子情報と紙による学術コミュニケーションの関わりについて実践的に考えたいということであって、いずれ本は全てオープンアクセスになる（すべき）という考えはないのです。先ほどお話ししたように、本は何のためにあるか、あるいはデジタル的なデータをオープンにするのは何のためかということを中心にきちんと仕分けして考えるべきだ、というのがその一つの理由であることはご理解いただきたいと思います。

それはともかくとして、オープンアクセスを考える際、受容する側のリテラシーの問題は大事だと思いますが、一方で、例えば博士論文は全部オープンアクセスにすべきだという非常に乱暴な考え方があります。それはそれで一つの考えだとは思いますが、でも、それでいいのか。博士論文は、こう言うのは何ですが、

しよせん主査と副査を対象に書いたものでしょう。自分が学位を取ろうとしているだけなので、他の誰に向けて書いたものでもありません。そういうものをオープンにして、本当に意味があるのだろうかと思うのです。

むしろその先に、「これは自分が博士号を取った論文だけれども、これこれの目的で誰々に読んでほしい」と思ったときに、それを本にすることもあるし、本にしない形で評価してほしいとなるかもしれません。ご質問にあったリテラシーというのは、主に使う側の問題をおっしゃっていると思いますが、むしろ私は、公開する側の使い分け、そのための分けや手法やコンセプトがきちんとしていないという問題の方が大きいのではないと思うのです。一般にユーザーのリテラシーは悪いに決まっているわけで、全国民に、このネット情報はこう見るべきであるというような教育はできないわけです。そうすると、出す方が使い分けをする方が大事なのではないかというのが、今の私の問題意識です。

●Eve しかし、公開して広く読んでもらわなければ、国民側もリテラシーを身につけられません。

●石居 この問題はまさに自分自身にも関わっていて、悩みながら試行錯誤しているところです。従来の、少なくともオープンアクセスを前提としない形であれば、どこまでのことを情報として書き込むかという線引きは、私の中では、学術的な出版物や論文のレベルなのか、一般向けの出版物であるのかということにあり、それによって情報の出し方を変えてきました。

ただ、オープンアクセスが前提になると、どこまで情報を出すかという問題はより切実です。特に被差別部落の問題は、一般的な関心として、「被差別部落はどこなのか知りたい」といった欲求の根強さをしばしば感じます。学術的な研究成果としては、ある程度地域が特定できる形で情報を出さないと意味をなさないケースが多々あり、そういうところでは出してきたの

ですが、それがオープンになるとすると、やはり第一段階として、当事者や情報提供者との間に、オープンアクセスを前提とした合意が得られているかということが問題になります。それがクリアできなければ、オープンアクセスを前提とする限りは、ある程度情報をセーブせざるを得ないだろうと思います。

それがクリアできたとして、さらにそれをオープンな情報として出すことについては、今の Martin さんのお話ではありませんが、触れることをとおしてリテラシーを鍛えてもらうのだという前提に立ち、そこまで書き手として覚悟を決められるのであれば、情報を出していくことに意味はあると思います。ただ、今までの書き分け前提の、書き手としての感覚を改めなければならないことだけは確かです。

●Eve 私は、学術性の高い文章を一般向けの読み物に編集する「Alluvium」というプロジェクトに携わりました。21世紀の文芸評論に関するジャーナルを、一般の人が読みやすい形で執筆したのです。本格的な研究論文本体へのリンクは表示しているものの、正式な論文に取って代わるようなものではありません。しかし、興味の対象やリテラシーの違いに応じて、多様なレベルで書分けをすることに価値があるのではないかと思います。

●蛭名 ありがとうございます。非常に多岐にわたる議論をしていただき、オープンアクセスとは何かということから始まり、学術をすることはどういうことか、それに対する一般市民との関係、リテラシーの問題など、かなり根源的なことを含んだ問題であることが非常にはっきりしたのではないかと思います。以上でパネルディスカッションは終了したいと思います。